講演会・講演要旨

「これからの社会で求められる能力とは ―企業が産業教育に期待すること―」

講　師　　林　明夫　氏
株式会社開倫塾取締役社長

どうもこんにちは。本日は、経済同友会からの出張授業講師として私をお呼びいただき心から感謝を申し上げます。こんな名誉なことはありません。

私は、栃木県、群馬県、茨城県の北関東3県で、開倫塾という小・中・高生対象の学習塾を60校舎経営しています。塾生はピーク時で約7,000名、教職員400名の規模です。

1　本日の講演の目的

本日は、これからの社会を見据えて、これからの社会で求められる能力とは何か、企業や社会が産業教育に期待することは何か、さらには、これからの学校教育のあり方について、ご参加の先生方と一緒に考えさせていただければと思います。

2　好きな言葉

はじめに、自己紹介を兼ねて、好きな言葉を紹介させていただきます。

「小学生は新聞を毎日読もう」

この言葉は、足利市立山辺小学4年生のクラス担任、岡典子先生からお教え頂きました。学校の先生がお教え下さったことはやらなければと、その日から、新聞を毎日読むようになりました。

「ブルドッグ魂」（食いついたら離すな）

山辺中学3年生のクラス担任の岡田忠治先生から教えて頂いた言葉です。一度やり始めたら、執念をもってやり通す精神が身に付きました。

「練習で泣いて試合で笑え」

この言葉は、中学の柔道部長の椎名弘先生から教えて頂きました。おかげさまで、栃木県大会団体戦で優勝するなど、すばらしい成果を出させていただきました。

「一所懸命」（一つの所で命を懸けるくらい熱心にものごとに取り組もう）

この言葉は高校のマラソン大会の合言葉でした。

「法学徒は常に最悪の場合を予想して行動すること」

この言葉は、慶應義塾大学法学部法律学科2年生の法思想史のゼミで峯村光朗先生から教わりました。「企業は原則倒産」、「会社の寿命は30年」と言われます。開倫塾は、創業36年目を迎えますが、まだ、倒産という企業にとり最悪の事態に至っていないのは、この教えのおかげです。

「注意一秒、けが一生」

この言葉は、大学3・4年生の時に、被害者学の権威で、刑事政策のゼミの宮沢浩一先生から教えて頂きました。宮沢先生には、数多の刑務所、少年院などの矯正施設に視察にお連れ頂きました。

「よき友、フェアプレイ、練習は不可能を可能にする」（スポーツで得られる3つの宝）

この言葉は元慶應義塾塾長の小泉信三先生からお教えいただきました。この言葉が大好きです。

「離見の見」（舞台で踊る自分の姿を、舞台から離れた客席の自分が見る、客観的に自分を見詰め直しなさい）

この世阿弥の言葉は、企業活動や社会活動をするにあたっては、各々組織の社会的使命を常に自覚した上で、自分の行動を客観的に振り返

り、省察することが大切だと教えてくれます。

「持続する志」（一度立てた志は持ち続ける）

ノーベル賞作家、大江健三郎先生の言葉です。

「目には遠いが心は近い」

これはインドのことわざです。志を同じくする人、同じ学校、同じクラスで勉強した人は、一生の友です。そういう友人とは、距離は遠く離れていても、心は近いところにある。心の中で、お互いに励まし合いましょうという意味かも知れません。

「教育ある人とは学び続ける人」

これは、経営学の大家、ドラッカー先生の言葉です。現代は知識社会です。知識社会で最も大切なことは一生学び続けることです。学校で学び基礎力を身に付け、その上に、変化の激しい現代社会に対応できるだけの力を身に付ける。すべての職業人，プロフェッショナルは、学校を卒業後も、学び続けなければならないということです。

「歴史における個人の役割」

岩波文庫に、ロシアの革命家、プレハーノフが書いた「歴史における個人の役割」という小さな本があります。家庭から始まって、学校、地域社会、国家、国際社会などありとあらゆる組織には、独自の歴史があります。一つ一つの組織は、一人一人の働きで歴史ができあがります。自分が属する組織の社会的使命を深く自覚し、どのような小さいことでもいいから、与えられた責任を果たす。組織にとり、その組織の「歴史における個人の役割」を自覚した人ほど大切な人はありません。

これらが私の好きな言葉です。学校の先生はじめ多くの方々から教えていただいた、これらの言葉を支えに、生きてきました。

3　これからの社会とはどのような社会であるか、そこで求められる能力は何か

次に、これからの社会とはどのような社会であるか、そこで求められる能力は何かということをご一緒に考えましょう。

（1）知識基盤社会

これからの社会は、知識が基盤になった社会（Knowledge Based Society）です。「知識基盤社会」で求められる能力は、「知識、情報、技術を相互作用的に用いる能力」です。

ここでいう「知識」とは、具体的には、小学校、中学校、高校など初等・中等教育機関、大学、短期大学、専門学校、専修学校、大学院など高等教育機関で学ぶ、体系的知識がその内容です。その「知識」と、マスコミやミニコミ、インターネットなどから得られる「情報」と、各自の専門領域の深い「技術」を、「相互作用的」に、うまく組み合わせながら「用いる能力」、これが「知識基盤社会」で求められる能力です。

（2）グローバル社会

これからの社会は「グローバル社会」です。外国の方がどんどん来たり、こちらから行ったりもしなければいけない時代ですので、「多様な集団で交流する能力」が求められています。

私の地元である栃木県足利市出身の衆議院議員に茂木敏充氏がいます。茂木氏が経済産業大臣のときに、日本の成長戦略として、5年間で1万社の日本企業の海外展開を支援する政策を出しました。おそらく、この1万社のうち8,000社以上は、医療、介護、福祉を含めたサービス産業です。今まで、製造業は大変な思いをして、海外展開をしてきました。製造業の貴重な経験を踏まえ、日本のサービス産業は海外展開していきます。

これからは、製造業、ＩＴ産業はもちろん、医療、福祉、介護を含むすべてのサービス産業分野も海外との関係は切っても切れません。ぜひ産業教育の具体的内容として、グローバル社会に不可欠な「多様な集団で交流する能力」を身に付ける教育をしていただきたく希望いたします。

「多様な集団」、つまり、国籍、民族、宗教、言語、行動様式、生活習慣、最終的には価値観が全く違った集団の中で、トラブルを起こすことなく、うまくやる、交流するにはどうしたらよいか。「関係は本質に先立つか」という命題がありますが、先立つと思います。自分の思考を一時停止し、エポケーの状態を作ったうえで、相手をあるがままに認め尊重する。小さな、一つ一つの関係を大切に築きながらコミュニケーションし、トラブルを避ける。ただし、おじけづくことなく、大切なことは伝える。自分とは、本質的には異なっていても、関係を大切にし、困難を乗り切る能力、これが「多様な集団で交流する能力」です。意思疎通で一番役に立つの

が、コミュニケーションの手段としての英語です。グローバル社会では、英語によるコミュニケーションが欠かせません。英語の教科書の内容はすべて役立ちます。教科書のスミからスミまで口をついて出るまで音読練習させてから、卒業させてください。教科書内容が正確に書ける、書き取り練習も欠かせません。

（3）課題山積社会

現代社会は、家庭、地域、企業、公共部門、自治体、日本、国際社会、地球などありとあらゆる場所で、今までにないような課題が、文字通り、山のように積み重なって存在する「課題山積社会」です。各々の「課題の発見」、「原因の推定」、「応急処置」、「システム変更」など、課題解決のための一連の作業をやり抜くには、高い志と、「自律的に行動する能力」が求められています。

4　これからの社会で求められる能力の前提となる能力

（1）「学習の仕方」を身に付けていること

以上の能力の前提になる能力は何か。「学習の学習」、つまり「学習の仕方を身に付けていること」と、「読書により思慮深さを身に付けていること」の2つです。

この「知識、情報、技術を相互作用的に用いる能力」、「集団で交流する能力」、「自律的に活動する能力」の3つの能力は、ＯＥＣＤのＰＩＳＡ調査の根底になる学力観である「キー・コンピテンシーズ」です。

ＰＩＳＡの内容として、ＯＥＣＤが研究をした成果がＰＩＳＡの根底となる学力観である「キー・コンピテンシーズ」です。この3つの「キー・コンピテンシーズ」の前提となる能力が、「学習の学習（学び方を学ぶ）の能力」です。学び方が身に付いていないと学力は身に付きません。学び方を学んでいる人ほど力があります。

開倫塾の塾生に、一番困っていることは何かと質問をしますと、勉強の仕方がわからなくて困っているが一番多い答えでした。

勉強の仕方を質問されるたびにお答えしていたのですが、あまりにも同じ質問が多いので、学習を「理解」、「定着」、「応用」の3つの段階に分け、各々の段階にふさわしい学習の方法を取りまとめてみました。これが私の考えた「学習の3段階理論」です。

・学習の第1段階の「理解」とは、「うんなるほどとよく分る、納得、腑に落ちること」です。
・学習の第2段階の「定着」とは、一度理解した内容をできるだけ正確に「身に付けること」です。
・学習の第3段階の「応用」とは「テストでよい点数が取れること」、「社会で役に立てること」です。

「理解」に欠かせないのは辞書の活用です。開倫塾の約5,000名の塾生調査の結果、学力を上げるのは、辞書を使いこなしている塾生であることがわかりました。そこで、各教科を勉強していてわからない言葉があったら「気持ち悪い」と思い、辞書を引くよう指導しています。

辞書を引いて意味を調べたら、その意味をノートに書き写す。書き写したノートは、授業前や、授業中、自学自習の時間に1ページから読む。書き取り練習もする。これを実行すると、言葉の力、語彙力が確実に増します。1日に10語で、1年365日で3,650語、3年で1万語、語彙が増えます。そうすると、全ての教科の教科書に書いてあることが大体わかる、「理解」できるようになります。辞書を用いる力を少しずつ身に付けることが「文章を読み解く力」つまり「読解力」の前提です。「辞書」は引いて、引いて、引きまくり、言葉の数、語彙力を自分の力で増強する。辞書の活用が「読解力」を身に付ける第一歩です。

「ノートが取れ、活用できる」ことが、理解では大切です。

「授業中にノートが取れるのは極めて高い能力」です。たとえば、私は、日本語の授業はいくらでもノートが取れます。これは日本語でノートを取る能力が極めて高いからです。英語の授業のノートは少ししか、フランス語やドイツ語、中国語やスペイン語の授業のノートは全く取れません。これは、英語でノートを取る能力は少しあるが、仏独中西語でノートを取る能力が私には全くないためです。

学年が上がれば上がるほど、各教科の内容は難易度が高まり、授業中にすべて理解することや、授業内容をその場ですべて身に付けることは困難になります。そこで、授業中に必要なことはノートに取り、授業後，ノート整理をし、

ノートを何回も読み返し、さらに深い授業の「理解」と「定着」に努める。授業の「理解」にノートを取ることは不可欠です。

「授業中にノートを取る能力」を身に付けることは、仕事でも役立ちます。「仕事はメモで身に付ける」ものです。仕事ができる人ほどメモを取ります。メモが取れないと仕事に支障をきたします。お客様と面談の約束をしても、時間や場所のメモが取れなかったら大変です。大事なことを打ち合わせしても、その内容のメモが取れなくては打ち合わせになりません。仕事には教科書はありません。仕事の上で、大切なことは、全部メモをし、後でそのメモを読み返し、深く「理解」すると同時にそれを身に付ける。一日の最後に、その日の仕事をメモを見ながら振り返える。メモを整理し、必要なことは付け加え、自分独自のノートを作り上げる。英語でノートはノートブックと言います。一冊の本のような「マイ・ノートブック」を作り、スミからスミまで、繰り返し、繰り返し読み返し、仕事の「理解」を深め、身に付ける、「定着」させると、職業能力が高まります。ですから、授業中に、大切なことはノートを取る能力を、学校時代に身に付けさせていただきたくお願いいたします。

授業の内容を「理解」するために「予習」は欠かせません。教科書や教材を、授業の前に自分の力で一行、一行よく読み、「理解」する。意味の分からない語句があったら辞書や用語集、参考書で調べる。調べた内容はノートに書き写し、その理解に努める。計算や問題はノートに解く。このような丁寧なプロセスを踏んで予習をしていくと、よく「理解」できたところと、よく「理解」できないところが、少しずつはっきりしてきます。

「予習は何のために行うのか」を突き詰めて考えると、「予習とは何がわからないかをはっきりさせて授業に臨むために行うもの」という考えに至ります。予習をして、何がわからないかをはっきりさせるということは、問題意識、興味・関心・意欲が極めて高いことを意味します。このような目的で授業の予習を行えば、授業での「理解」は極めて高いといえます。予習は何のためにするのか、予習の「意味」もぜひ教えてください。

ちなみに、仕事の上でも、よくわからない、不確かなところをはっきりさせて、打ち合わせや会議などに臨むことは大切です。

「理解」が深まる授業の受け方とは何か。手を机のうえに置き、先生の目や口元を見つめ授業を受けると、理解が深まります。折角先生が万全の準備をなさって授業に臨んでも、欠席、遅刻、早退、居眠り、スマホ、私語などしていると、授業における「理解」の妨げになります。

「理解」した内容を身に付けるには、すらすらよく読めるようになるまで声を出して繰り返し読ませる「音読練習」と書き順を含め正確に楷書で書けるまで「書き取り練習」を繰り返すことが有効です。

簡単な計算や問題はパッパと答えが出るまで「計算・問題練習」も有効です。この３つの練習を「定着のための３大練習」といいます。「定着のための３大練習は、不可能を可能にする」、学力の大幅アップを約束します。

「応用」とは「試験でよい点をとること」と、「社会で役立てること」です。学校でも、社会に出てからも、受けなければならない試験はたくさんあります。試験の受け方、よい点数の取り方を身に付けておくのは大切です。もちろん「理解」と「定着」だけでも良い点数はとれますが、過去に出題された問題、「過去問」を解き、一度解いた過去問とその解答・解説を学校の教科書のように、丁寧に「理解」し「定着」させると、どんな試験でも「よい点数」がとれます。

教材と同様に、入試や定期試験、検定試験など様々な試験の作問を担当する先生方は、文字通り、一所懸命、命がけで問題をつくっています。自分の命を削りながら、真剣につくっている先生も数多おられます。教材として用いても素晴らしい問題が多いので、一度解いた問題は、教科書同様、大切に、大切に学び直すことを教えていただきたく思います。

（２）「読書による思慮深さ」を身に付けること

読書により得られる能力は何か。本格的な読書の絶対量が多ければ多いほど、文章を読み解く力、「読解力」が身に付きます。同時に、読書により思慮深さが身に付きます。教科書で紹介している本や、図書館の本を、ゆっくり、丁寧に、腰を据えて読む。気に入った語句や文章は、たとえ一語、短い文章であっても「書き抜

き読書ノート」に書き抜き、折に触れ読み直す。これも能力です。

（3）「新聞を読み、自分で考える力、批判的思考（Critical thinking）能力」を身に付けていること

仕事の基本は、顧客価値の創造です。お客様のお役に立って初めてお客様を得ることができます。お客様のお役に立つとは何か。提供する商品やサービスがお客様の問題や課題の解決に貢献することです。同じような問題や課題を持つお客様が社会にたくさんいれば、お客様の問題解決、課題解決は、社会の問題解決、課題解決に貢献します。

仕事とは、お客様のお役に立つこと、お客様のお役に立つことで、社会のお役に立つことです。社会の変化が激しいため、何がお客様や社会の問題・課題であるかを知らないと、それらを解決する製品やサービスの提供はかないません。世の中の動きを知るために役に立つのが、新聞を一面から舐めるよう毎日読むことです。新聞を読み「自分で考える力」と、「批判的思考力」を身に付け、顧客や社会の問題解決、課題解決に直結する製品やサービスを提供することが大切です。

全ての教科でＮＩＥ、新聞を教育への取り組みと、気になる記事は「スクラップブック」に保存し何回も読み返すこともご指導ください。

5　企業や社会が学校教育、職業教育に期待すること

（1）自分のよさや潜在能力を自分の力で見出し、自分の力で伸ばすこと

自分のよさや、潜在能力を見出し、伸ばすためには、家族のよさ、友人のよさ、クラスのよさ、東京のよさ、日本のよさ、アジアのよさを、一つでも多く見出すことが大切です。他人のよいところを見出すことができれば、自分のよさ、潜在能力は必ず自分の力で見出すことができます。

（2）自覚を持って学ぶこと

教育の成果を決定する要因とは何か。本人の自覚と、教師の力量です。ただし、自覚するようにと言われても、すぐにできるものではありません。教師が行うべきは、自覚を促すことです。自覚を促すことができることも教師の力量に入ります。

（3）自分から進んで積極的に学ぶこと

学力とは、「主体的に学ぶ力」です。この意味での学力こそが、イノベーションの担い手である企業家に求められる能力です。

（4）課題を自らの手で発見をして、自らの手で解決する

「主体的に学ぶ」能力を身に付けて、初めて、課題発見、課題解決が可能となります。

（5）今まで行ってきたこと、現在行っていること、それから、これから行おうとすることの「価値」、「意味」を自分の力で考えること

今まで行ってきたこと、現在行っていること、これから行おうとしていることの「価値」や「意味」を自分の力で考える力を養ってもらいたい。何のために、ここにいるのか、何のためにこの科目を勉強しているのか、今なぜこの職業教育を受けているのか、これから行く修学旅行にはどんな意味があるのか、体育祭・文化祭はどのような大切さがあるのかなど、身近なところから、その「価値」や「意味」を自分の力で考える。そういう習慣を学校教育の中で身に付けさせていただきたい。一つ一つの行動について、その価値を考え、意味づけをして、その上で、「自己決定」。自分でやること、やらないことを自分で決める。

「意味づけ」、「自己決定」をし、自分のルール、「秩序」に従い行動をする。「価値」、「意味」、「秩序」など、基本的な考えに基づいて、行動できるような教育をお願いいたします。

職場の上司が「あなたの潜在能力はこれです」と言うことは難しいですが、自分で見つけた潜在能力を、伸ばす手伝いは職場でもできます。ですから、職場でも潜在能力を自分で見つけ、それを仕事場で発揮してもらいたい。

自分から進んで、仕事に関するいろいろな知識や情報、専門的な技術を主体的に学ぶ力を身に付けている社員が多ければ多いほど、企業は、成長、発展、永続します。

仕事に関する問題や課題を自らの手で発見して、自らの手で解決する。グループやプロジェクトチームで発見し、解決する。そして、働いている会社や組織、担当している仕事の「価値」、「意味」、さらには、「社会的使命」、「ミッション」を考え、自覚する。意味づけをして、行うべき

こと、行わないことを決定する。ルールに従って秩序立った行動を心掛ければ、素晴らしいプロフェッショナル、プロフェッショナル集団となります。このような「自律的に行動する能力」が、企業や社会で最も求められる能力です。

コリンズが「ビジョナリー・カンパニー」という永続する企業の条件とは何かについての本を出し、大評判となっています。永続する企業の絶対条件は何か。「自律的な人材」が、「自律的な考え」を持って、「自律的に行動」する、こういうような企業こそが、永続する企業の絶対条件であるということを、４巻にわたって書いています。

（６）５Ｓを身に付けること

職業教育、産業教育で、ぜひやっていただきたいのは「５Ｓ」です。「５Ｓ」の「整理」とは、「不要なものを捨てる」こと。「清掃」とは「常にきれいにする」こと。「整頓」とは、「すぐに取り出せるようにする」こと。「清潔」とは、「それらを保つ」こと。「躾」とは、「自分から進んでやる」ことです。

足利商工会議所には「足利５Ｓ学校」があります。足利市役所や小、中、高校でも「５Ｓ」が盛んです。「５Ｓ活動」のメッカのような街が足利市です。「足利５Ｓ学校」で検索していただきますと、ホームページがありますので、ご興味ある方は参考にしていただければと思います。

（７）別の意味での「躾」を身に付けること

別な意味での「躾」、これも大事だと思います。それは、「美しい立ち居振る舞い」と、「敬語表現を含む言葉遣い」です。「美しい立ち居振る舞い」には服装も入ります。服装は大切です。

（８）職業人として社会に出てからの勉強の仕方を身に付けること

社会に出てからが勉強です。社会に出てからが本当の勉強です。もちろん学校の勉強はとても貴重な尊いものです。学校での勉強にプラスして、社会へ出てからの勉強が大事です。社会に出てから学ばなければならないことが山ほどありますので、できれば学校の勉強は学校で完結、できるだけ、身に付けた上で卒業してもらいたい。

一番学校にお願いしたいのは、パソコンです。学校で勉強したことになってはいても、エクセルやワードが身に付いていない人がたくさんいます。パソコンの授業で教えたことが身に付いているかを検証、確認いただいてから卒業させていただきたい。身に付いていない人は、卒業の年の３月31日まで責任を持って教えていただきたく思います。

（９）社会に出てから「したほうがいいこと」と「してはいけないこと」を身に付けること

一番大切な教科は、「保健」、健康教育です。せっかく学校や家庭ですばらしい教育を受けても、死んだり、病気になったりしたら大変なのです。健康のためにやっていいこと、よくないこと、こんなことをすると病気になるよということを、厳しく指導していただきたい。どうしたら、生涯にわたって健やかに生きることができるかを、食育も含め、お教えいただければありがたく思います。

それから、法教育、規範教育です。世の中にはいろいろなルールがあり、ルールの中で自由自在に活動することの大切さを、教えていただきたい。

来年から18歳以上が有権者となります。そこで、主権者、有権者としての教育、主権者教育をやっていただければ有難いです。

(10) 社会に出る前の最後の教育機関としての自覚をもって、最終学年の最終日までのご指導を

英語とパソコンだけは、卒業の年の３月31日まで教えてもらいたい。パソコンの教科書に載っていることはちゃんと身に付いているかどうか、また、英語の教科書に出ていることがすらすら口をついて言え、正確に書けるかどうか。英語とパソコンができないと話にならないので、ぜひこれだけは責任をもってご指導いただければと思います。

６　学校教育の在り方についての提言

（１）ＯＥＣＤや、政府、文部科学省で議論している教育改革の内容を十分に活用し、あるべき学校教育を目指していただきたいと思います。

職業教育、産業教育の分野で、文部科学省や、教育再生会議の議論とベクトルが合うものだけでも、先行実施していただければ、日本のためにも、生徒のためになります。よろしくお願いします。

（2）日本の文教政策の大半は、ＯＥＣＤの調査、研究の成果を踏まえて行われています。そこで、ＯＥＣＤの調査・研究成果と文科省の教育改革の議論の推移をお調べいただき、ご自分の学校で一番ふさわしいと思われるプログラムを、先行して積極的に取り組んでいただければと思います。

（3）公益社団法人経済同友会では、教育改革、人材育成、企業経営などについて、たくさん提言しています。ホームページを見ていただいて、ぜひお読みいただければと思います。経済同友会の会員である経営者を、交通費も含め無料で学校に派遣する「出張授業」も、積極的にご活用下さい。

（4）政府の教育再生会議や文部科学省が行っている「教育改革」は、今やっていることの延長上の「インプルーブメント（改善）」ではなくて、もしかしたら「イノベーション（刷新）」、つまり、今までと全く違うことをやろうとしています。

（5）このような教育改革の時期こそ、皆様の学校でも、「自己責任」、「自助努力」、「自分の未来は自分で切り開く」、「あきらめたらおしまい」の精神で、失敗を恐れることなく「教育のイノベーション」にご挑戦をいただきたく思います。

シュンペーターがイノベーションを提唱しました。企業家精神で、この教育改革を先行実施すれば多くの挑戦ができます。文部科学省からのペーパーを読めば、専門学校、高等学校として挑戦できることが山ほどあることがお分かりになります。

これからは、高等専門学校は工業だけに限られません。サービス産業や農業などの産業分野でも、高等専門学校の可能性は極めて高いといえます。専門学校の可能性として、高等専門学校をお考え頂ければ、プロフェッショナル養成として、ありがたい限りです。

また、専門学校では、高校卒業生以外にも、数多くの短期大学卒業生、大学卒業生、さらには大学院修了生が学んでいます。そうであるなら、専門学校は専門職大学院を目指していただければありがたく思います。

このように、専門学校を高等専門学校か専門職大学院という形で、学校法人の内容を変えてもらいたい。専門学校で学ぶ人のためにも、また、地域の発展のため是非お取り組みいただきたく思います。特に、就業者数の７～８割を占めるサービス産業の分野ではこの要請が強いと考えます。

（6）イノベーションを目指す際には、ベストプラクティスのベンチマーキングをぜひ戦略的に行ってもらいたいと思います。最も優れた実践例（ベストプラクティス）を素直な心で学ぶこと（ベンチマーキング）を積み重ねた上で、独自性のある取り組みをし、発信し続けていただきたい。

（7）学校の先生、管理職の方こそ、誰に遠慮することなく、生涯にわたって勉強し続けてもらいたい。できれば専門領域を深め、経営能力を高めるために、修士課程、博士課程で学んでいただきたい。

（8）外国人の留学生や、先生、管理職、事務職員の積極的な受け入れもしていただきたい。これから先、日本人だけで学校は成り立つのかというと、私は危ないと思います。ですから、生徒、先生、事務職員、経営幹部の３分の１以上は外国の方に来ていただいて、学校を経営する。これが、これからの産業教育の在り方です。

（9）知識基盤社会で大切なのは生涯にわたって学び続けることです。高校、大学、専門学校、高等専門学校、大学院などに出たり、入ったりを繰り返しながら、学び続けること。卒業させたらそれでおしまいではなくて、必要なことは、出入りを繰り返し、学び続ける。外国、特に欧米では、複数の学部、複数の大学院修了者が驚くほどたくさんいます。

(10) 皆様の学校で特色ある行事や、取り組み、調査や、研究をなさるときには、マスコミや、ミニコミにニュース・リリースや取材のご案内をお送りして、取材をしてもらったらよいと思います。学校の取り組みを広報という形でＰＲすることをお勧めいたします。広報担当をお決めになり、できれば、１か月に１回は地元の新聞社やＣＡＴＶ、ラジオ局などを定期的に訪問。人間関係を築くことが広報の第一歩です。取材を受ける際には、記者の皆様に、真実を、できるだけわかりやすく、丁寧親切に説明、理解をいただくことが大切です。

学校であっても、顧客とは誰か、これを明確

に定義することです。開倫塾は、地元密着の学習塾として、顧客を塾生、保護者、地域社会と定義しています。ぜひ皆様の学校でも自分たちの顧客を定義なさることをお勧めいたします。顧客にコミュニティも入れていただければ有難く思います。

仕事とは何か。「事業領域」や「企業ドメイン」をはっきりさせれば、仕事が明確になります。

国際競争力のある学校づくりも欠かせません。皆様の競争相手は誰かといえば、インドなどで盛んな「ロー・コスト・プライベート・スクール（低価格私立学校）」だと思います。インドには、1カ月の月謝が500円くらいの、ロー・コスト、安い価格の、プライベート・スクール、私立学校があります。この学校の特色は、全ての教科を英語で教えているということです。インドの方はもう知っています、英語ができなければ貧困から脱却できないことを。コンピューターができなければ貧困からの脱却はできない。こう考え親たちは一生懸命働いて子供たちを学校に通わせる。子供たちは、親の願いを理解し、期待に応えようと、貧困から脱却するために、英語とコンピューターを一生懸命勉強し、大学院修士課程、博士課程を目指します。文系大学進学希望者も高校3年生まで数学を学び続けます。微分積分までほぼ全員が勉強するのが、インドの高校の特色です。微積まで学んだうえで、コンピューターを学びますから、どんどん身に付きます。高校時代に寝る時間以外は勉強の生活を送った人がインドの専門学校で学びますから、職業教育もすばらしいと思います。本当に熱心です。多くの学生が眠る時間以外勉強しています。皆様にはインドの職業教育を、ぜひ、勉強していただきたいと思います。

7　最後に

先生方こそ「励まし合う仲間つくり」を心掛け、孤立しないでいただきたい。経済同友会の提言に対してご意見があれば、事務局あてにお出しいただければ、経済同友会の事務局や担当委員会で検討させていただきます。

生徒には、読むべき本や、訪ねるべき場所があったらどんどん紹介していただければと思います。こんな本を読んだらいいよということを、校長先生初め先生方が理由を添えて教えれば、生徒の何人かは必ず読みます。同時に、学校図書館は大事ですので、ぜひ充実させていただきたい。図書館で、1学期に1回以上は、全教科の授業をしてもらいたい。教科ごとの図書館の利用の仕方を身に付けさせ、卒業までに図書館で勉強する習慣を身に付ける。公立の図書館や大学の図書館でも勉強する習慣を身に付けてもらいたい。学校図書館を含め、全ての図書館は365日、朝6時から夜12時まで開館し、図書館で学ぶ機会を提供していただきたい。

社会教育施設の活用も大切です。東京都は本当によだれが垂れそうな施設がたくさんあります。ぜひ、親しみ、活用していただきたい。

一つの生き方として、人生を35の倍数で考え、3分割する。知識基盤社会では、35歳過ぎまでは勉強です。70歳過ぎまで仕事。105歳過ぎまで、自由自在に生きていく。各々の段階で、どのような生き方をしたらよいかを考えると楽しいと思います。自分はこれしかないでもいいですが、これもやるし、これもやるし、これもやると、柱になるものを3つぐらいつくってやっていくと、少し大変ですが、3本柱のすばらしい生き方ができます。

最後に、私の近所にお住まいであった，書家の相田みつを先生からお教えいただいた「一生勉強、一生青春」という言葉を、ご紹介させてもらいまして、私の話を締めせてさせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。（拍手）